

## 祖堂集卷第十五

江西下卷二曹溪第三代法孫

西堂和尚、馬祖に嗣ぐ。虔州に在り、師諱は知藏。

一秀才有り、問うて曰く、天堂地獄有りや。師云く、有り。又た問うて曰く、佛法僧寶有りや。師云く、有り。秀才云く、但そ問う處、盡く有りと言つ。和尚与摩に道う是れ錯りなること莫きや。師云く、秀才曾つて什摩いすれの老宿に見えしや。秀才云く、曾つて径山和尚に見えたり。師云く、径山秀才に向かつて作摩生か説きし。云く、一切総に無しと説けり。師云く、秀才唯だ獨一身なりや、還た別に眷屬有りや。對えて曰く、某甲は山妻有り。兼ねて兩顆の血屬有り。師云く、径山和尚は還た妻有りや。對えて曰く、他の径山和尚は眞素の道人にして純一無雜なり。師呵して云く、径山和尚は内外嚴護し、理行相い稱つ。一切悉く無しと道うこと即ち得たり。公は三界を具足するの凡夫にして、妻を抱き兒を養む。何の種か作なざらん。是れ地獄の相滓なり。什摩に因りて一切悉く無しと道うや。若し径山に似なば、公に無しと道うことを聴さん。秀才、礼して懺謝す。

・具足三界凡夫 三界の煩惱を具足した凡夫ということである。

・地獄相滓 四一八三頁にも同じ語が見える。また二一一一頁にも。

馬祖、師を遣わして書を送りて國師の処へ到らしむ。路に在りて天使に逢見す。天使は遂に留めて齋する次いで、驢の啼くに因りて天使頭陀と喚ぶ。師乃ち頭を拳ぐ。天使使ち驢を指して師に示す。師却つて天使を指す。天使無對。

馬祖和尚は師を使いに出して、手紙を國師のところへとどけさせた。途中勅使に出会つた。勅使は師をとどめて齋したが、口バが鳴いたとみると頭陀と呼びかけた。そこで師が顔をあげると勅使は口バを指さして師に示した。師は反対に勅使を指さす。勅使無對。

・國師 伝灯録七では忠國師となっている。但し口バの話はない。

又た國師の處に到る。國師問う、汝が師は什摩の法を説くや。師は東邊より西邊に過ぎりて立つ。國師云く、只だ者个か為當別に更に有りや。師又た東邊に過ぎりて立つ。國師云く、這個は是れ馬師底、仁者作摩生。師云く、早个すでに和尚に呈似し了れり。

さて國師のところへやって来た。國師が問う、お前さんの師匠はどんな法を説いているか。師は東がわから西がわに行つて立つ。國師が云う、これだけか、あるいはほかにあるのか。師は今度は東がわに来て立つ。國師が云う、これは馬祖和尚のだ。お前はどつなのだ。師が云う、とつくに和尚さんに見せましたよ。

師曾つて一僧を焼す。僧一日有つて身を現じて命を覓む。師云く、汝は還た死せりや。對えて云く、死せり。師云く、汝は既に死せり。命を覓むる者は誰ぞ。其の僧遂に見えず。

自外未だ行録あんぞくを覩みざれば終始を知らず。勅して宣教禪師元和正眞の塔と謚す。

鵝湖和尚、馬大師に嗣ぐ、信州に在り、師諱は大義、衢州須江縣の人なり。姓は徐、依年具戒し、禅律俱に通ず。大寂に江西に礼し、一たび祕蹟を扣くや豁然として玄悟し、洪州に契心す。縁に応じて上都に次するに、考文皇帝詔して入内せしめ、諮請して道を問う。徳宗朝、麟徳殿に大に論議を延ぶ。人有り問う、心有ならば曠劫にして凡夫に滞り、心無ならば刹那にして妙覺に登ると。師答えて曰く、此れ乃ち梁武の言なり。然れども心有ならば是れ有に滞る。有既に有なり。安ぞ解脱すべけんや。心無ならば何人にしてか妙覺に登らん。師以らく、群英と十号と、等しく有ならば、已に迷う者終に復た悟らずと為し、等しく無ならば已に悟る者終に却つて迷わずと為す、と。是に於いて群英執伏して僉曰く、玄以て比する無し、と。

師は諸碩徳に問うて曰く、行止偃息す。畢竟何を以て道と為すや。人有り云く、知者はれ道。師云く、識を以て識す可からず、智を以て知る可からず。安ぞ知者はれ道なるを得んや。人有り云く、無分別是れ道。師云く、善く能く諸法の相を分別して第一義に於いて動かす。安ぞ無分別是れ道なるを得んや。人有り云く、四禅八定是れ道。師云く、佛身無為にして衆數に墮せず。安ぞ四禅八定是れ道なるを得んや。

大師の旨、一切法是、一切法非、無性無像に於いて得有り喪有り。豈に一方の定趣を以て決して道と為す可けんや。所以に不定の辯を以て不定の執を遣り、無方の道に趣かしむ。

・興福寺内道場供奉大徳大義禪師碑銘全唐文七一五(参照)。

・十号 少し奇異であるが、群英即ち衆生に対する佛の意に解しておく。

・等有云々等無<sup>云</sup> 所謂常見断見を遮遣したものであろう。

・不可以識識<sup>云</sup> 維摩經見阿閼佛品の語。

・善能分別<sup>云</sup> 佛國品。

・佛身無為<sup>云</sup> 弟子品。

・一切法は一切法非 一切の法は肯定され、一切の法は否定され。

師頌して曰く、直下に玄旨を識せば羅紋結角是なり。玄旨を識せざるの人徒らに示す所を逐つことを勞す。鶇鳴たる鳥の空池を守るごとく、魚の脚下従り過ぐるも鶇鳴として惣に知らず。

・羅紋結角 難解。葛藤語箋参照。

・鶇鳴 鳥の鳴き声。

經論の供奉大徳有り、順宗皇帝の前に對して問う、如何なるか是れ四諦。師は聖人を指して云く、當今是れ一諦、三諦何にか在る。大徳無對。

・當今は一諦、三諦何在 伝灯録では「聖上一帝、三帝何在」とする。音が同じであることを利用したギャグである。

供奉又た問う、欲界無禪、禪は色界に居す。此の土何に憑りて禪を立つるや。師答えて曰く、法師は只だ欲界無禪なる有るを知るのみにして禪界無欲なる有ることを知らず。供奉云く、禪界無欲、如何なるか是れ禪。師は手を以て空中に点すること一下す。供奉無對。皇帝云く、只だ這の一点、法師すら尚お奈何ともする勿し。

師は元和十三年戊戌の歳正月二日遷化す。報齡七十四、勅して慧覺大師見性の塔と謚す。國相韋厚碑文を制す。

伏牛和尚、馬大師に嗣ぐ、北京に在り。師諱は自在。未だ實録を覩ざれば化縁の終始を究むる莫し。

師は小師を放て行脚せしむる時、頌して曰く、汝を放て南行して大津に入り、碧潭の深處に金鱗を養わしむ。等閑にして凡魚と伴うこと莫れ、直に龍門を透りて便ち出身せよ。小師答えて曰く、魚龍未だ変ぜざるも志は常に存す、変じ了らば還た海氣をして渾ならしめん。両眼曾つて小水を窺わず、一心専ら擬す龍門を透らんことを。千迴網を下すも終に繫すること難く、万度鉤を垂るるも誓つて吞まじ。我れ一朝にして鱗甲備わり、解く雲雨を將つて乾坤に灑ぐを待て。小師は便ち是れ第二の伏牛なり。

師に三个の不帰の頌有り、曰く、愛を割き親を辞して俗迷に異り、雲の如く鶴の似く更に高く飛ぶ。五湖四海隨縁し去り、到處家と為すは一の不歸なり。苦節して形を勞し法威を守り、幸に知識に逢つて玄微を決す。慧燈初めて照らして昏衢朗らか、唯だ自親に

報ずるは二の不帰なり。峭壁幽岳往復する希に、片雲孤月毎に相依る。徑行宴坐閑として無事、樂道逍遙するは三の不帰なり。

・伏牛和尚については、一一二八頁、一六〇頁参照。

盤山和尚、馬大師に嗣ぐ、北京に在り、師諱は寶積、未だ姓氏を詳らかにせず。

師は時有つて衆に示して云く、心若し無事ならば万法生ぜず。意玄機を絶たば懺塵何にか立たん。道は本より無躰、躰に因りて名を得。道は本より無名、名に因りて号を得。若し即心即佛と言わば、今時にして未だ玄微に入らず。若し非心非佛と言わば、猶お是れ指蹤の極則。向上の一路千聖傳えず、學者形を勞すること猿の影を捉うるが如し。大道は中無し、復た誰か前後せん。長空は際を絶す、何を用てか之を量らん。空既に斯くの如し、道豈に言わんや。心月孤り圓にして光万像を呑む。光は境を照らすに非ず、境も亦た存するに非ず。光境俱に亡ず、復た是れ何物ぞ。禅徳、譬えば劍を擲て空に揮うが如く、及ぶと及ばざるとを論ずる莫し。斯れ乃ち空輪の跡無く、劔刃の虧くるに非ず。若し能く是くの如く心心無知ならば、全心即佛、全佛即人なり。人佛無異にして始めて道と為す。禅徳、可中道を學ばば地の山を撃けて山の高峻を知らざるが似く、石の玉を含んで玉の無瑕なるを知らざるが如くせよ。若し能く是の如くせば是れ出家と名づく。故に導師云く、法は本より相碍つること無く、三際も亦た復た然り。無為無事の人も猶お是れ金鎖の難あり、と。所以に古人道く、靈源獨り耀く、道は本より無生。大智は明に非ず、真空跡を絶す。真如凡聖は皆な是れ夢言。佛及び涅槃並びに増語と為す、と。禅徳、切に須く自看すべし。人の替代する無し。三界無法、何れの處にか心を求めん。四大本空、佛何に依りてか住せん。旋機不動、寂尔として根なし。觀面に相い呈す、更に餘事無し。珍重。

・意絶玄機 原本は境絶玄機。伝灯録に従つて改める。

・若言即心即佛云 東寺和尚の伝に「毎日、自大寂禅師去世、常病好事者録其語本、不能遺筌領意。認即心即佛、外無別說。曾不師於先匠、只徇影跡。且佛於何住而曰即心。心如畫師、貶佛甚矣。遂唱于言、心不是佛、智不是道。劔刃遠矣。尔方刻舟」とあるのを参照。

- ・ 向上一路千聖不傳 齋雲和尚の傳に、この語に関する問答がある。
- ・ 光境俱亡復是何物 伝灯録十八長生皎然の伝にこの語をとりあげた問答がある。
- ・ 可中學道 原本は可學中道に誤記。 伝灯録に従つて改める。
- ・ 導師云 古人道 出所不明。
- ・ 三界無法何處求心 碧岩録三七則参照。
- ・ 旋機 伝灯録は捨機。

強大師拈じて福先に問う、向上の一路は古人の宗、學者徒らに勞す捉影の功。若し不傳と道わば早に傳え了れり。不傳の路、師の通ぜんことを請う。福先答えて曰く、盤岫高く提ぐ向上の宗、興り来たりし諸聖は舌に功無し。吾が師既に問う不傳の事、問當するも何ぞ愁えん為に通ぜざること。

強大師が拈じて福先に問う、向上の一路は古人の宗である。それを学ぶ者はむなしく影法師をとらえようとすることのみだ。もし不伝と云つたならばすでに伝えたこととなります。不伝の路をどうか通して下さい。福先が答えて云う、いわおの山に高くかかげる向上の宗は、むかしの諸聖も舌先ではどうにもならない。あなたは不伝の事を問つたのだから、問いつめても通してやらないことをなんでつれえることがありません。

・ 問當 記當はちゃんとおぼえる。當は強める語気。

問う、牛頭未だ四祖に見えざりし時如何ん。師云く、有量の事は龍鬼も尋めべし。進んで曰く、四祖に見えし後如何ん。師云く、脱量の機は龍鬼は尋ぬること難し。進んで曰く、見えし後什摩と為てか百鳥来たらざる。師答えて曰く、絲在らば能く歌舞し、線断すれば一時に休む。

問う、牛頭和尚が四祖のお目にかからない時はどうですか。師が云う、有量の事は龍鬼もうかがうことができる。進んで云う、四祖のお目にかかった後はどうですか。脱量の機は龍鬼がうかがうことはむずかしい。進んで云う、お目にかかったあとどつして百鳥が来なかつたのですか。師は答えて云う、操りの糸があれば歌ったり舞ったりするが、糸が切れればそれでおしまい。

師遷化に臨みし時、衆に謂いて云く、遷た人の吾が眞を遊し得る有りや。若し人有つて吾が眞を遊し得れば老僧に呈似し看よ。衆皆な写真を將つて和尚に呈似す。師盡く打す。時に一少師普化なる有り。出て来て云く、某甲師が眞を遊し得たり。師云く、老僧に呈似し看よ。普化倒行して出づ。師云く、我れ汝這般底を著く可からず。向後別處に去きて風顛を打し去れ。

師は遷化にのぞんだ時、大衆に向かつて云つた、誰かわしの肖像を描けるか。もしわしの肖像を描けるものがいたら見せなさい。大衆は皆な肖像画を和尚に見せた。師は誰もかれも打ちたたいた。時に普化という小師がいたが、出て来て云つた、わたくし和尚さんの肖像を描きました。師が云う、見せなさい。普化はあとずさりして出て行つた。師が云う、わしゃお前のようなそんなやつは置いとけん。これからはよそに行つて風顛をやらかすことだ。

師は平生住持の軌範嚴整なること常に異り、海内名を聞く。凝寂大師眞際の塔と勅謚す。

麻谷和尚、馬大師に嗣ぐ、甫州に在り。師諱は寶徹、未だ姓氏を詳にせず。

師は丹霞と遊山し、水中の魚を見る。師手を以て丹霞を指す。丹霞云く、天然。師明日に至り、却つて問う、昨日は意作摩生。丹霞便ち臥する勢を作す。師曰く、蒼天、蒼天。

師は丹霞と遊山し、水中の魚を見た。師は手で丹霞を指す。丹霞が云う、天然だ。師は明る日になって問うた、きのうはどうい

うつもりだったんだ。丹霞は死んだふりをする。師が云う、やれ悲し、やれ悲し。

・蒼天 葬式の時に哭する言葉。

師、行脚せし時、三角に到る。三角和尚上堂して云く、此の事は眉毛を𦓐上すれば早已に差過せり。師便ち問う、承らく、和尚言有り、此の事は眉毛を𦓐上すれば早已に差過せり、と。如何なるか此の事。三角云く、差過せり。師便ち繩床を擔倒す。三角和尚便ち之を打つ。

師は行脚していた時三角山に來た。三角和尚が上堂して云う、この事は眉をつりあげたらもうすれちがっている。師が問う、承わりますと和尚さんはこの事は眉をつりあげたらもうすれちがっているとおっしゃっているそうですがこの事とは何ですか。三角が云う、すれちがったぞ。師は繩床をかつぎ倒す。三角和尚はそれを打つ。

・𦓐上眉毛 敵に出くわした時などにするきつとした顔つき。

問う、十二分教は某甲は疑わず。師便ち起ちて去る。

問う、十二分教はわたくし疑いませんが、と、師は起ちて去る。

問う、如何なるか是れ佛法の大意。師良久す。其の僧却って石霜に拳似すらく、此の意如何。石霜云く、主人慇懃にして闍梨を帯累して拖泥涉水せしむ。

塩官和尚、馬大師に嗣ぐ、蘓州に在り、師諱は齊安、未だ姓氏を詳かにせず。



法空禪師到る有り。師に経中の諸義を問う。師答え了る。師云く、禪師到来するも貧道忽に未だ主人と作ることを得ず。禪師云く、和尚の主人と作らんことを請う。師云く、日已に將に晩ならんとす。且く本位に歸りて安置し、明日却り来れ。師は明朝沙弥をして法空禪師を屈せしむ。禪師時に應じて来る。師は沙弥を呵して云う、この沙弥は事を了せず。法空禪師を屈し来たらしむるに何が故に守堂人を屈得し来れるや。

法空禪師がやって来て、師に経中の諸義を問うた。師は残らず答えた。師は云う、禪師はおいで下さったけれども、わたしは全くまだ主人役ができておりません。禪師が云う、どうか主人役をおつとめ下さい。師が云う、もう暮れようとしております。且く住居にもどつてやすまれ、明日お出直し下さい。師は翌日沙弥を使いに出して法空禪師にご足勞願させた。禪師はすぐにやって来た。師は沙弥を叱つて云う、この沙弥やるべき事もやらんわい。法空禪師にご足勞願させたのに、なんで守堂人などご足勞願つたのだ。

・惣未得作主人 法空禪師が師に主人役をつとめさせるほどの客人でないことを裏から云つたもの。

僧師に参ず。師云く、汝は是れ阿誰ぞ。對えて曰く、法忻。師云く、我れ汝を識せず。

僧が師に参ずる。師が云う、お前さんは誰だ。答えて云う、法忻です。師が云う、わしはお前さんを知らんぞ。

問う、如何なるか是れ本身盧舎那佛。師云く、我が与に那个の銅瓶を將取し来れ。僧瓶を取り来れり。師云く、却つて本處に送して安置せよ。僧便ち本處に送り已つて再び来りて問う、如何なるか是れ本身盧舎那佛。師云く、古佛や過去すること久し。

問う、何が本身盧舎那佛ですか。師が云う、どうかあの銅瓶をもって来てくれ。僧は瓶をとつて来る。師が云う、今度はもとのところにもつて行って置いてくれ。僧はもとのところへもつて行って、再び来て問う、何が本身盧舎那佛ですか。師が云う、古佛は行ってしまわれて久しいことだ。

大中皇帝潜龍の日、曾て礼して師と為し、甚だ對答の言論有り、具さに別録に彰る。悟空禪師棲眞の塔と勅謚す。眞塔浩瀚なること非常。北に汾州有り、南に塩官有り。

・眞塔 眞人を安置した塔。

五洩和尚、馬祖に嗣ぐ、越州に在り、師諱は靈嘿、姓は宣、常州の人なり。

師未だ出家せざる時、京に入りて選官し去るに、洪州開元寺に到りて大師に礼拝す。大師問う、秀才什摩の處にか去く。云く、京に入りて選官し去る。大師云く、秀才太だ遠きなり。對えて云く、和尚が此間すかんに還た選場有りや。大師云く、目前什摩をか嫌うや。秀才云く、還た選官するを許すや。師云く、但だ秀才のみには非ず、佛も亦た著おかず。此れに因りて大師に投じて出家せんと欲す。大師云く、汝が与に剃頭することは即ち得たり。若し是れ大事因縁は即ち得ず。此れ従り攝受す。後具戒す。

師が未だ出家していなかった時、都に官吏の試験を受けに行つたが、途中洪州の開元寺に立ち寄つて、馬大師に拜謁した。大師が問う、学生さんどこに行きなされるのかね。答えて云う、都に官吏の試験を受けに行きます。大師が云う、学生さんはなはだ遠いな。答えて云う、和尚さんのここにも試験場がありますか。大師が云う、今の自分のどこを嫌っているのか。学生が云う、試験を受けさせてくれますか。師が云う、学生さんだけじゃない、佛さんでも置いてはやらない。この因縁で大師に投じて出家しようとした。大師が云う、お前さんのために頭を剃つてやるのはよいが、大事因縁のことは知らんぞ。そこで弟子として受け入れた。師は後に具戒した。

・還許選官也無 弟子として大師の選仏道場に置いて呉れますかという語気。

・非但秀才佛亦不著 卷三鶴林和尚の伝に「有僧敲門。師問、是什摩人。對曰、僧。師曰、非但僧、佛來亦不著。進曰、佛來為

什摩不著。師曰、此間無公止泊處」とあるのを参照。

一日有つて、大師大衆を領して西墻の下に出でて遊行する次いで、忽然として野鴨子の飛過し去る。大師問う、身辺什摩物ぞ。政上座云く、野鴨子。大師云く、什摩いすれの處に去りしや。對えて云く、飛過し去れり。大師政上座の耳を把つて拽く。上座は忍痛の聲をな作す。大師云く、猶お這裏に在り。何ぞ曾つて飛過せしや。政上座豁然として大悟す。

此れに因りて師は好氣無し。便ち大師に向かつて説く、某甲この業次を抛却し、大師に投じて出家せり。今日並びにこの動情無し。適来せきい政上座是くの如き次第有り。乞う大師、慈悲して指示せよ。大師云く、若し是れ出家ならば師は則ち老僧なり。若し是れ發明ならば師は則ち別人なり。是れ你驢年にして、我が這裏に在るも也た得じ。師云く、若し与摩ならば則ち乞う、和尚この宗師を指示せよ。大師云く、此より去ること七百里にして一禅師有り。呼んで南岳の石頭と為す。汝若し彼中かしこに到らば、必ず来由有らん。

師便ち辞して石頭に到りて云く、若し一言もて相契わば則ち住とどまらん。若し相契わざれば則ち發し去らん。鞋履を著け、坐具を執り、法堂に上りて禮拜一切しり侍立す。石頭云く、什摩いすれの處よりか来たる。師、意に在かず、對えて云く、江西より来たる。石頭云く、受業什摩の處にか在る。師祇對せず。便ち拂袖して出づ。纔に門を過る時、石頭便ち咄す。師一脚は外に在り、一脚は内に在り。石頭便ち側掌して云く、生れてより死に至るまで只たこの漢なるのみ。更に腦を轉じて什摩をか作す。師は豁然として大悟す。和尚の面前に在りて給侍すること數載、呼びて五洩和尚と為せり。

後、人有りて洞山に拳似す。洞山云く、登時若し是れ五洩ならずんば承當すること難かりしならん。此くの如しと雖然いえども猶お途に渉る在り。

自後長慶云く、嶮。

淨修禅師拈じて僧に問う、只だ長慶の与摩に道うが如きんば、意作摩生。僧無對。自ら代わつて云く、他かれが認處の錯あやてることを恐る。

人有り拈じて漳南に問う、古人道えらく、生まれて従り死に至るまで只だこの漢是なりと。和尚如何ん。漳南云く、地獄の相漳は只だ人の作り了る有るのみ。僧云く、深く和尚が尊旨を領す。古人什摩に因りてか与摩に道いし。漳南云く、只だ這般の漢の爲のみ。僧云く、与摩ならば則ち忘前失後にし去らん。漳南云く、頭上は禿ならず、肚裏に毒無し。僧云く、貪りて天上の月を看、室中の月を忘却す。漳南便ち失聲す。

ある日馬大師は大眾を引きつれて、西墻のあたりに出てぶらぶらしていると、突然野鴨が飛んで行つた。大師が云う、今のは何だ。政上座が云う、野鴨です。大師が云う、どこへ行つたんだ。答えて云う、飛んで行きました。大師は政上座の耳を引っ張つた。上座は痛さをこらえる声をあげた。大師が云う、まだここに居るじゃないか、いつ飛んで行つたのだ。政上座は豁然として大悟した。

それを見て師は面白くなくなって、大師に云つた。わたしはあのツトメをなげすて、和尚に投じて出家したのです。それなのに今日なんの変わったこともありません。今は政上座にあのようなことがありました。どうか和尚、お慈悲です、教えて下さい。大師が云う、出家のことなら師匠はわたしだ。發明さとりのことなら師匠は別人だ。お前さん驢馬の年をとつてわしのところにおいても駄目だぞ。師が云う、もしそうならどうか和尚さん宗師を教えて下さい。大師が云う、ここから七百里のところ一人の禪師がおられる。人呼んで南岳の石頭和尚という。お前さんもしあそこに行つたら、きつときっかけがあるだろう。

そこで師は馬大師の下を辞して石頭のところへ行つて云う、もし一言で和尚の心に契つたらとどまりましょう。もし契わなかつたら発ちましょう。師は鞋をはき、座具をとつて法堂に上つた。礼拝の儀一切おわつて侍立する。石頭が云う、どこから来たか。師は意のあるところもわからずにこたえて云う、江西から来ました。石頭が云う、受業したのはどこで。師は答えもせず袖をはらつて出ようとす。門を過ぎかかった時石頭が咄した。師は一脚は外に在り、一脚は内に在るまま頭をめぐらして石頭を見る。と石頭は側掌して云う、生まれてから死ぬるまでただこの男だ。ことさら頭をめぐらしてどうしようというのだ。師は豁然として大悟した。石頭和尚の前で給侍するもの数年、人は五洩和尚と呼んだ。

のちある人が洞山に拳似する。洞山が云う、そのとき五洩和尚でなければものにするは大いに難しかったらう。そうだけれどもなお途に涉っている。

のち長慶が云う、きわどい。

浄修禅師が拈じて僧に問う、長慶がああ云ったのはどういう気持ちか。僧無對。自分で代わって云う、彼が認めたところがずれてはしないかと恐れたからである。

ある人が拈じて漳南に問う、古人は生まれてから死ぬるまでただこの男がそつだと云っております。和尚さんどうですか。漳南が云う、地獄の相滓はただ人だけがなりおさせるのだ。僧が云う、和尚さんのおっしゃることはよくわかります。じゃあ古人は何故あのように云ったのですか。漳南が云う、ただただあの手合いのためだ。僧が云う、とすると忘前失後ということになりませんね。漳南が云う、頭も剃らず、腹に毒無しだ。僧が云う、天上の月を貪り見て、室中の燈を忘却すですね。漳南は失声する。

・發明 伝灯録四智殿の伝「入牛頭山謁融禅師、發明大事」。また楞嚴經には「發明無漏」(卷三)、「精眞發明、地如佛地」。「因諸渴仰、發明虛想」等種々の用例がある。

・只這個漢 趙州和尚の伝に「問、如何是本来人。師云、自從識得老僧後、只這個漢、更無別。僧云、与摩則共和尚隔生也。師云、非但千生与万生、也不識老僧」とあるのを参照。

・猶涉途在 涉途は痕跡を残す存り方を云うのである。ここに見られる五洩批判は、以下の問答者に共通するものである。

・嶮 二一〇七頁、四一九〇頁にも長慶はこの語を用いている。

・浄修禅師 福先招慶師号。

・恐他認處錯 他は五洩を指す。

・地獄相滓只有人作了也 石頭和尚の為人のところをこう云ったものと思われる。

・忘前失後 手足の措置どころをしらない様子。

・頭上不禿肚裏無毒　ピリツとしたところがないということか。元の諺に「無毒不丈夫」というのがある。

僧問う、何物か天地より大なる。師云く、人の伊がれを識り得る無し。僧云く、還はた彫啄す可きや。師云、你試みに手を下し看よ。

越州の觀察使、人を差して師に問わしむるらく、禪に依りて住持するや、律に依りて住持するやと。師偈を以て答えて曰く、寂寂として持律せず、滔滔として坐禪せず。儼茶三両碗、意は饗頭邊に在り。觀察使人を差して百柄の饗頭を送らしむ。師纔かに送り来るを見るや棒を把つて趁出却して云く、我一柄の饗頭有り。平生用いて盡くさず。誰か你の送り來たるを要せん。專使却り來りて具さに前事を説けり。觀察使遙かに礼拝を申ぶ。

越州の觀察使が使いを出して師に質問させた、禪によつて住持していらつしやるのですか。律によつて住持していらつしやるのですか。師は偈で答える。曰く、寂々として持律することもしないし、滔滔として坐禪することもしない。二三碗の濃い茶、意はくわに在る。觀察使は使いを出して百挺のくわをとどけさせた。師は使いがとどけてくるのを見るや棒で追い出して云う、わしには一挺のくわがある。平生使つても使つても使いきれん。贈り物などよけいなお世話だ。使いはもどつてすつかり出来事を話した。觀察使は遙かに礼拝をする。

・儼茶三両碗、意在饗邊　儼茶は饗頭が育てたもの。船子の「垂絲千丈、意在深潭」という語とよく似た表現。

問う、此个門中始終の事如何ん。師云く、你道え目前成り來たれること多少の時ぞ。僧云く、不會。師云く、我が此間すかんに你適來問う底無し。僧云く、豈に和尚は人を接する處無きや。師云く、你の求むるを待ちて則ち接せん。僧云く、請う和尚接せよ。師云く、你什摩をか欠少する。

問う、この門中の事はどうですか。師が云う、今の自分になってからどれくらい経ったか云つて見なさい。僧が云う、わかりま

せん。師が云つ、わしのところには今問つたよつなものは無いということだ。僧が云つ、和尚さんは人に会いようがないのですか。師が云つ、お前さんが求めるんなら会おう。僧が云つ、どうか和尚さん会つて下さい。師が云つ、お前さん何が足りないというのだ。

・ 豈無和尚接人處 伝灯録では和尚豈無接人處。この方が良い。

師は元和十三年化縁周く畢る。澡浴して香を焚き、繩床に端坐して大いに僧衆を集む。慇懃に叮囑して囑累し、門徒を開諭して云く、妙色眞常にして本より生滅無し。法身圓寂寧ぞ去来有らん。千聖源を同じくし、万靈一轍なり。吾今示滅するも哀を興すを假らず。強いて形を勞すること無く、須く正念を存すべし。儻し此の命に遵わば、眞に我が恩に報ず。若し固く言に違わば、吾が弟子に非ず。

人有りて問つ、什摩の處にか去る。師云く、處無ぎに去る。僧云く、某甲何を以て見ざるや。師云く、眼の覩る所に非ず。洞山拳するを聞きて云く、作家。

師正坐し疊掌して光を収め、一刹那の間にして便ち圓寂に帰す。亭齡七十二、僧臘三十一。沙門志閑碑文を撰す。

大梅和尚、馬大師に嗣ぐ、明州に在り。師諱は法常、襄陽の人なり。荊州玉泉寺に受業す。纔かに尸羅を具するや學は衆典に通じ、大小本の經論を講ず。多聞は益ありと雖も、辯注虚しく張るのみ。情神に爽うを覚え、遊方して道を訪う。江西の馬大師の學に誨するを聞き、師は乃ち直に法筵に造る。

因みに一日問う、如何なるか是れ佛。馬師云く、即ち汝が心是なり。師進んで云く、如何んが保任せん。師云く、汝善く護持せよ。又た問う、如何なるか是れ法。師云く、亦た汝が心是なり。又た問う、如何なるか是れ祖意。師云く、即ち汝が心是なり。師進んで

云く、祖に意無きや。馬師云く、汝但だ汝が心の法として備わらざる無きことを識取せよ。師言下に於いて頼に玄旨を領す。遂に錫を杖いて雲山を望む。因に大梅下に至りて便ち棲心の意有り。小許の種糧を求めて一たび深幽に入るや更に再び出でず。

ある日問う、何が佛ですか。馬大師が云う、お前さんの心こそがそうだ。師は進んで云う、どのように責任をもちましよう。馬大師が云う、善く護持しなさい。又た問う、何が法ですか。馬大師が云う、同じくお前さんの心がそうだ。又た問う、何が祖意ですか。馬大師が云う、ほかでもないお前さんの心がそうだ。師が進んで云う、祖師には意がないのですか。馬大師が云う、ただお前さんの心にはそなわらない法はないのだと見てとりなさい。師は言下に玄旨を頓悟して錫を杖して雲の上を望んだ。大梅山のふもとに來た時、棲心の決意を固めた。そこで少しばかりの食料を求めて、一たん深山幽谷に入ると一度と出ては來なかつた。

後因みに塩官和尚出世す。僧有り、柱杖を尋ねて山に迷い、其の一人の草衣結髪し、小皮舎に居るを見る。僧を見て先に不審と言う。而も言語蕃洪なり。僧は其の由を窮む。師云く、馬大師に見えたり。僧問う、此に居ること多少の年なるや。師云く、亦た多少の年なるかを知らず。只だ四山青みりて黄ばみ、青みりて又た黄ばむを見るのみ。是くの如くすること三十余度を計る可し。僧は師に問う、馬祖の處に於いて何の意旨をか得たる。師云く、即心是佛。其の僧出山の路を問う、師指して流れに随つて去らしむ。

其の僧歸りて塩官の處に到り、具さに上の事を陳ず。塩官云く、吾れ憶するに江西に在りし時、曾つて一僧の馬大師に佛と法と祖意とを問うを見たり。馬大師皆即ち汝が心是なりと言いたり。三十余年自ら更に其の僧の所在を知らず。是れ此の人なること莫きや。遂に数人に令して教すらく、舊路に依りて山を斫りて尋ね覓めよ。如し見なば云え、馬師近日非心非佛と道う。と。其の数人塩官の教に依りて問う。師云く、任徐非心非佛なるも我は只管に即心即佛なり。塩官聞きて嘆じて曰く、西山に梅子熟せり。汝が曹は彼に往きて随意に採摘し去る可し。是くの如くして二三年に足らざるの間に、衆数百に上る。凡そ應機接物は對答流るるが如し。

のち塩官和尚が出世した。ある僧が柱杖にする木を探して山に迷い、一人の男が草衣結髪して木はだぶきの小屋に住んでいるのを見た。僧を見て先に挨拶したが言葉はどもりがちであつた。その僧が経歴をたずねると、師が云う、馬大師にお目にかかりまし



た。僧が問う、ここには何年くらい住んでおられるのですか。師が云う、わたしも何年くらいか知らないのです。ただ四方の山が青んでは黄ばみ、青んでは黄ばみするのを見るばかりで、三十ぺんあまりでしょうか。僧が師に問う、馬祖和尚のところでのよくな宗旨を得られましたか。師が云う、即心即仏です。その僧は出山の路を問う、師は流にそって行くように指示する。

その僧は塩官のところに帰りつき、上の出来事をつぶさに物語った。塩官が云う、思い出すと、江西にいた時、ある僧が馬大師に仏と法と祖意とを問うのを見たっけなあ。馬大師は全部「即ち汝が心是なり」と答えられた。それから三十余年、その僧の在りかを一向に知らない。この人ではなからうか。そこで数人に命じて云う、来た路をたどり山を切り開いて探しなさい。もし見つけたら云いなさい、馬大師は近ごろでは非心非仏と云っておられると。命を受けた数人は、塩官の指示どおりに問うた。師が云う、たとい非心非仏でもわたしはひたすら即心即仏だ。塩官はそれを聞く后感嘆して云った、西山に梅の実が熟したぞ。お前さんがたあそこへ行つて、意にまかせて摘みとるがよからう。かくして二三年にも満たない間に、大衆は数百人にもものぼった。凡そ應機接物には、流れるように受け答えした。

因みに夾山、定山と大梅山に去く。路上行する次いで、定山云く、生死中に佛無くんば則ち生死に非ず。夾山肯わずして自ら云く、生死中に佛有らば則ち生死に迷わず。二人相い肯わずして去きて大梅山に到る。夾山自ら問う、此の二人の道えるは阿那个か最も親しき。師云く、一親一疎。夾山云く、阿那个か是れ親しき。師は苦ろに問われて乃ち云く、且く去りて明日来たれ。夾山明日来たりて問う、昨日未だ和尚の垂慈を蒙らず。未審いぶかし阿那个か是れ親しき。師云く、問う者は親しからず、親しき者は問わず。

あるとき夾山と定山とが大梅山へ行った。路すがら定山が云う、生死中に仏が無ければ生死ではない。夾山は肯わずに自分で云う、生死中に仏が有るならば生死に迷わない。二人とも肯わなまま大梅山に着いた。夾山は自分から問う、わたくしたち二人の云ったことのうち、どちらが最も親しいでしょうか。師が云う、一親一疎だ。夾山が云う、どちらが親しいのですか。師はしつこく問われて云う、まあ行きなさい。そして明日来なさい。夾山は明るる日やって来て問う、昨日ははまだ和尚さんのお教えをこ

うむっていません。一体どちらが親しいのでしょうか。師が云う、問うものは親しくないし、親しいものは問わない。

・ 夾山 夾山善會であるかどうかは定かではない。定山については不明。

人有り、塩官に問う、如何なるか是れ西来意。官云く、西来に意無し。僧師に拳似す。師云く、一個の棺裏に兩個の死屍を著<sup>お</sup>く可からず。

・ この問答は立場が逆となって伝灯録塩官の伝に見える。そこでは「不可一个棺裏云々」の句が「一箇棺材、兩箇死屍」となっている。意味は同じ。

師の順世に臨みし時、鼯鼠叫す。師は衆に告げて曰く、即ち此の物にして他物に非ず。汝等諸人善く護持せよ。吾は今逝かん。師は言已つて室を掩じ、来辰化せり。括州刺史江勳碑文を撰す。

永泰和尚馬大師に嗣ぐ。師諱は靈瑞、姓は黄、衡陽の人なり。年十一にして南嶽に出家し、年十八にして沙弥と為る。大寂に門津し、嘿して心要を領す。年二十四にして雙峯寺に進具し、大寂の法會に却帰す。

貞元一年丙寅の歳、青州に遊ぶ。州牧張胤請うて龍興寺に止まらしむ。元和中、青州は人大いに飢え、人多く殍仆す。師は脇席に至らず。人を視ること傷むが如くす。乃ち富屋を率いて壇度を行わしむ。是れに繇りて浄名給孤競いて垂乘下<sup>?</sup>。

師は左臂に肉環有り。臥するに常に右脇す。占者曰く、寔に人天の師なり、と。

後尚書薛平待以て師と為す。凡そ二十三年大いに青社を化す。故に青州和尚と号す。襄陽に遊ぶに及び、廉使牛元翼礼重して曰く、人中の師子王なりと。請うて感通寺に止まらしむ。又た荆渚に至る。僕射王潜請うて永泰寺に住せしめ、金を布きて道を闡き、大いに化度を展べしむ。大和三年戊子の歳六月三日順世す。春秋六十九なり。茶毘して舍利五千余粒を得たり。郭東に塔す。劉軻碑文を

制す。道鏡禪師寶眞の塔と勅謚す。

・布金 須達長者が祇園精舎を買った故事。

・宋高僧伝に荊州永泰寺釋靈象という人が見えるが、「徒步江陵 太守王潜請居永泰寺。太和三載六月二十三日終于住寺。春秋七十五云」とある。何らかの関わりを有する人ももしれない。

東寺和尚、馬大師に嗣ぐ、潭州に在り。師諱は如會、韶州始興江縣の人なり。大曆八年國一禪師の門下に止る。後大寂に歸せり。衆皆な徳を仰いで臻湊すること林の如し。榻の之が為に折る。時に折床の會と稱す。後長沙の東寺に止まり大いに洪規を播く。

毎に曰く、大寂禪師世を去りてより、常に、好事の者の其の語本を録して、筌を遺れて意を領する能わざるを病む。即心即佛のみにして外に別説無しと認む。曾つて先匠を師とせずして只だ影跡に徇つのみ。且らく佛の何に於いて住してか即心と曰つや。心は畫師の如くなれば佛を貶すること甚し。遂に言を唱うらく心は是れ佛ならず、智は是れ道ならず、と。劔去ること遠くして忝して方めて舟に刻するのみ。

常に曰く、大寂禪師が世を去られてから、好事の者がその語録を記録し、筌を忘れて意を得ることができないのを、いつも苦々しく思っている。即心即仏だけで他に何も説かなかったと思ひこんでいる態たらくだ。全く先師を師とせず、影を追いかけているに過ぎぬ。ならば佛がどこに居るとして即心というのか。心は畫師の如しというのだから、佛をおとしめるのも甚だしい。そこで心は佛ではない、智は道ではないなどといった文句を云つものがあるが、劔去ること遠くしてはじめて舟に刻むようなものだ。

・録其語本 仰山の伝五一七四頁云に、「道存問曰、達摩和尚既不將楞伽經來、馬大師語本及諸方老宿數引楞伽經云」とあるのを参照。

・遺筌領意 莊子の語にもとじく。

・心如畫師 楞伽經八十段の句。

・心不是佛云 南泉の語。

時に東寺を号して禪窟と為せり。丞相崔公胤、其の風韻を高しとし、躬から師に問つて曰く、師は何を以て得たりとすや。師曰く、見性をば得たりと為す。公云く、師は見性するや。師曰く、見性す。師は當時方に眼を病む。相公譏つて曰く、既に見性と言つ、其の眼奈何ん。師云く、見性は眼に非ず。眼は病むも何をか害わん。相公喜びて礼拝す。

更に師と佛殿に到りて雀兒の佛頭上に糞を放つを見て相公問う、者个の雀兒に還た佛性有りや。師云く、有り。相公云く、既に有るに什摩と為てか佛頭上に向かつて屙するや。師云く、他に若し無くんば什摩に困りてか鷄子頭上に向かつて屙せざるや。相公此れより礼拝して師と為す。自後長慶聞きて意く、嶮。

師南泉に問う、近ごろ什摩いすれの處を離れたるや。對えて曰く、近ごろ江西を離る。師云く、還た馬大師の眞を將ち得來たるや。對えて云く、將ち得來たり。師云く、將ち來たらば則ち老僧に呈似し看よ。對えて云く、只だ這個是れ。師云く、背後底。南泉登時に休す。後長慶云く、和尚ただ知らざるに似たり。保福代わつて云く、泊ぼとんど和尚が此間に到らざらんとす。

師が南泉に問う、近ごろどこを離れたか。答えて云う、江西を離れました。師が云う、馬大師の肖像を持って來たか。答えて云う、持って來ました。師が云う、持って來たのならわしに見せてごらん。答えて云う、これこのとおり。師が云う、うしろは。南泉たちまちぐつとつまる。後長慶が云う、和尚ははなはだ知らないらしい。保福が代わつて云う、あやうく和尚のそこにたどりつけないところだった。

・この則は保福の伝に出ている。

師仰山に問う、什摩いずれの處をか離る。對えて曰く、廣南を離る。師曰く、廣南に鎮海の明珠有りと説くを見る。還かへた是なりや。對えて曰く、是なり。師云く、此の珠作摩生。對えて曰く、白月には則ち隠れ、黒月には則ち現る。師云く、還た此の珠を將もち得來たるや。對えて云く、將ち得來たり。師云く、若し將ち來たらば老僧に呈似し看よ。對えて云く、昨日瀉山に到りしに、瀉山和尚某甲に就いて此の珠を索め、直に言の對う可きこと無きを得たり。師は一跳して背を撫でて云く、眞の師子兒、眞の師子兒。又た云く、慙愧、慙愧。老僧は瀉山に如かず。汝は便ち是れ瀉山の弟子なり。

師が仰山に問う、どこから來たか。對えて云う、廣南から來ました。師が云う、廣南には海を鎮める明珠があると聞いておるが、ほんとうか。對えて云う、ほんとうです。師が云う、この珠はどんな風だ。對えて云う、白月には隠れ、黒月には現れます。師が云う、この珠をもって來たか。對えて云う、もって來ました。師が云う、若しもって來たのならわしに見せてくらん。對えて云う、先だつて瀉山に行きました。瀉山和尚がわたくしにこの珠を求めましたが、なんともものも言えないほどでした。師はひとつ跳びして仰山の背をなでて云う、ありがたや、ありがたや。わしは瀉山にやかなわぬ。お前さんはまぎれもなく瀉山の弟子だ。

仰山受戒せし後再び到りて相見せんとし、纒かに法堂に入るや師便ち云く、已に相見し了れり、更に上來するを用いず。對えて云く、與摩に相見するは當らざるること莫きや。師便ち法堂に入つて門を閉却す。後に瀉山に拳似す。瀉山云く、子は是れ什摩の心行ぞ。仰山は受戒の後、再びやつて來て相見しようとし、法堂に入つたとたん師が云う、相見は了つた。もうやつて來んでもよい。對えて云う、そのように相見することは當らないのではないですか。師は法堂に入つて門を閉ざす。仰山はのちに瀉山に拳似する。瀉山が云う、あんたどついつつもりだ。

・師便入法堂閉却門 伝灯録では「師歸方丈 閉却門」とある。この方が状況をとらえ易い。

師は長慶癸卯の歳に終わる。春秋八十なり。時に井泉涸れ、異香馥郁たり。城南に塔す。故に廉使李公翱、盡く近城の塔を毀つに、唯だ師の塔をのみ留む。筆書して曰く、獨り此の塔を留めて以て賢愚を別つ、と。劉軻碑文を撰す。

鄧隱峯和尚、馬大師に嗣ぐ、建州邵武縣の人なり。

因みに南泉示衆して曰く、銅瓶は是れ境なり。瓶中に水有り。我水を要す。境を動かすを得ざれ。水を將ち來たれ。師便ち瓶を將つて南泉前に到り、水を寫出す。

師因みに行きて五臺山に至る。金剛窟前に到立して逝けり。衆の聖窟を妨ぐるをもつて處を易えて茶毘せんと擬するに、竟に動かすこと能う莫し。先に親妹の出家して尼と為り彼れに在る有り。其の兄の行跡を諳るに及び、遂に近前して呵して云く、師兄は平生人と為り法律に依らず。死後も亦た世情に徇う能わざるか、と。手を以て推し倒せり。衆は闇維するを獲て北臺の頂に塔せり。

平生世に在りしとき、唯だ一偈を留むるのみ。曰く、獨絃の琴子君が為に弾ず、松栢長に青くして寒に順わず。金と鑛と相い和するも性は自ら別なり、君が前に向かつて試みに取り看るに任せん。

歸宗和尚馬大師に嗣ぐ、江州廬山に在り、師諱は智常、未だ姓氏を詳かにせず。師は久しく南泉と同道し、神彩奇異なり。時人は之を、合して一人の分有るかと猜つ。師遂に薬を以て其の眼を熏じて赤からしむ。時人号して赤眼の歸宗和尚と為せり。

白舍人の江州の刺史と為りしとき、頗る甚だ殷敬す。舍人師に參ず。師は壁に泥する次いで、師首を廻らして云く、君子儒か、小

人儒か。白舎人云く、君子儒なり。師は泥鍔を以て泥板を敲つ。侍郎泥挿を以て泥を挿して師に送与す。師は便ち接し了りて云く、是れ俊機の白侍郎なること莫きや。對えて云く、不敢。師云く、只だ送泥の分有るのみ。

白舎人が江州勅史であつた時、すこぶる師を敬愛した。あるとき舎人は師に参じた。師は壁に泥をぬりながらふりかえつて云つ、君子儒か、小人儒か。白舎人が云つ、君子儒であります。師は泥鍔で泥板をうった。侍郎は泥挿で泥をすくつて師にわたす。師は受けとつて云つ、スマートの白侍郎さんだね。答えて云つ、どういたしまして。師が云つ、泥をわたすことはちゃんとやりよる。

李万巻なる有り、白侍郎相引きて大師に礼謁せしむ。李万巻師に問う、教中に言有り、須弥は芥子を納れ、芥子は須弥を納ると。須弥の芥子を納るるは時人疑わず。芥子の須弥を納るることは妄語を成すこと莫きや。師却つて問う、國家に於いて何の藝もて出身せるや。聲を抗げて對えて云く、和尚豈に知らずや、弟子は万巻もて出身せり。師云く、公は何に因りてか誑勅する。公云く、云何んが誑勅せし。師云く、公は四大身若子かのていしん長大なるに万巻何の處にか安著せん。李公言下に礼謝して事えて焉を師とす。万巻讚じて曰く、廓を出でて送錢するは要らざるを嫌う、手に蓆笠を提げて廬山に向かわん。昔日嘗つて聞く青霄の鶴ありと、更に青霄の鶴の如かざる有り。

師偈ありて曰く、帰宗事理絶し、目輪正に午に當る。自在なること師子の如くにして、物に依怙せず。獨歩す四山の頂、優遊す三本の路。吹嘘すれば飛禽墮ち、嘖呻すれば衆獸怖る。機立ちて箭及びぶこと易く、影没して手覆つこと難し。施張すること工伎の如く、剪裁すれば尺度を成す。功みに万盤の名を鏤し、帰宗還りて土に似る。語は密にして音聲絶え、理は妙にして言措くこと難し。箇の耳を弃てて還た聾し、箇の眼を取つて還た瞽す。一鍬もて三関を破し、分明なり箭後の路。忼伶个の丈夫、天に先んじて心祖と為る。

師時有つて帽子を拈起して問う、會するや。對えて曰く、會せず。師曰く、恠しむ莫れ、老僧頭風して帽子を下さざるを。

師はある時帽子をつまんで問う、わかるか。答えて云う、わかりません。師が云う、悪く思わんでくれ、わしは頭痛がするので帽子をぬがんだ。

問う、如何なるか是れ諸佛の玄旨。師云く、人の能く會する無し。僧云く、向つ者如何ん。師云く、向つこと有らば則ち乖く。僧云く、向つこと無き者如何ん。師云く、誰か玄旨を求むる。其の僧時に無語。師云く、去れ、子の功を用いる處無し。僧云く、豈に方便門の學人をして得入せしむる無きや。師曰く、有り。僧云く、如何なるか是れ方便門。師云く、觀音妙智力能く世間の苦を救う。僧云く、如何なるか是れ觀音妙智力能く世間の苦を救う。師は鼎蓋を敲つこと三下し却つて問う、子還た聞くや。云く、聞く。我什摩と為てか聞かざる。僧無對。師は之を打つ。

問う、どのようなのが諸佛の玄旨でしょうか。師が云う、わかる者はいない。僧が云う、向う者はどうですか。師が云う、向うことがあればそれる。僧が云う、向うことのない者はどうですか。師が云う、誰が玄旨を求めているのだ。その僧はその時無言である。師が云う、行け、お前さんが手間かけるところはない。僧が云う、わたしを得入させてくれる方便門は無いのですか。師が云う、ある。僧が云う、どのようなのが方便門ですか。師が云う、觀音妙智力能く世間の苦を救う、だ。僧が云う、觀音妙智力能く世間の苦を救うとはどういうことでしょうか。師は鼎のふたを三度打つて問う、聞こえるか。僧が云う、聞こえます。師が云う、わしには何故聞こえないのだ。僧無對。師は僧を打つ。

・觀音妙智力云 法華經普問品の句。

李万卷問う、大藏經は今の什摩邊の事を明らかに得るや。師は拳を竖起して却つて問う、汝還た會するや。李公對えて云く、會せず。師云く、者の李公拳頭すら也た識せず。李公云く、某甲會せず。請う和尚指示せよ。師云く、人に遇わば途中も授与す、人に遇わざれば則ち世諦もて流布す。



李万巻が問う、大蔵経はどんなことを明らかにしているのですか。師はげんこつを突つ立てて問う、わかるか。李公は答えて云う、わかりません。師が云う、李公ともあるうものがげんこつさえ分かんとは。李公が云う、わたしにはわかりません。どうか和尚さんお教え下さい。師が云う、その人に会えば道の途中でも与える。しかしその人に会わなければ世諦で流布する。

・世諦 大蔵経の教えなどを指すのであろう。もし金剛経流に不遇人こそ遇人だとすれば、いわゆる平常底を意味することにならう。

師衆の為に曰く、吾今合に禅を説くべし。諸子惣に近前來せよ。大衆盡く近前す。師云く、汝聴け観音行善く諸の方所に應ずること。弘誓深きこと海の如く、歴劫も不思議なり。多千億佛に侍して、大清淨願を發せり。師又た問う、阿那个か是れ観音行。師却つて禅指一下して問う、諸人還た聞かや。衆皆な云く、聞く。師云く、者の一隊の漢、這裏に向かつて什摩をか覓むる。趁出したつて阿呵大笑す。

・汝聴観音行云 法華経普門品の句。

師園中に入りて一株の菜を見、圓相を畫いて裏却して衆に謂いて曰く、輒ち者个を損著するを得ざれ。衆僧更に敢えて動著せず。師時に却來し、菜株の猶お在るを見て便ち杖を把つて趁打し、呵して云く、者の一隊の漢、一个の智慧有るもの無し。

師は菜園に入って、一株の野菜を見、円を描いてとりかこんだ。修行僧達に云う、勝手にこれ円相で莊嚴された野菜をこわしてはならんぞ。修行僧達は誰一人手を出そうとはしなかった。師はしばらくしてもどつて来たが、依然として野菜のあるのを見、杖をとつて追いかけて打つてどなった、この連中には一人も智慧のあるものがおらんわい。

師僧に問う、什摩の處よりか来る。對えて云く、某處より来る。師云く、還た那个を將ち得来るや。對えて云く、將ち得來れり。師

云く、什摩の處に在りや。僧は手を以て頂上より擧げ出して師に呈似す。師は手を挙げて向後に抛つ。僧無對。師云く、者の野狐兒。師が僧に問う、どこから来たか。答えて云う、どこそこから来ました。師が云う、あれを持ってきたか。答えて云う、もって来ました。師が云う、どこに在るか。僧は手で頭の頂からさざけ出して師に見せた。師は手をあげてうしろにはおり投げる。僧無對。師が云う、この野狐め。

・僧以手從頂上擧出呈似師 法華經安樂行品の「王解髻中明珠賜之、如来亦爾云」とある物語をふまえた仕草である。

師草を割る次いで、一座主有り来りて相看す。忽ち一條の蛇を見る。師便ち鑷もて断てり。座主云く、久しく帰宗に嚮うに、元来只だ是れ龐行の沙門なるのみ。後に人有り挙して長慶に問う、帰宗蛇を鑷す、意作摩生そもさん。長慶云く、錯。明眞瑠庵主に拳似す。庵主云く、性命を把り將ち来れ。明眞肯わず。石門代わつて云く、專甲庵中に在りて只だ是れ柴を劈き菜を種うるのみ。

師が草を刈っていた時、一人の座主が会いにやつて来た。ひよいと一匹の蛇が現れた、と見ると師は鑷でまっ二つにした。座主が云う、久しく帰宗和尚を慕っておりましたのに、なんと龐行の沙門に過ぎなかつたとは。のちある人が長慶に拳して問う、帰宗が蛇を断ち切つたのはどういふ意図があつたのですか。長慶が云う、錯誤だ。明眞が瑠庵主に拳似する。庵主が云う、生命をもつていらっしやい。明眞はうけがわなない。石門が代わつて云う、わたしは庵に住んでひたすら薪を割り野菜を植えるばかりだ。

・錯 意云々に答えるのではなく、師の行為に対する批判。殺生戒を犯すことが悪業であることは常識であるから、長慶の批判は殺生戒を犯してまでやるうとした師の為人底に向けられているのでなければならぬ。そもそも殺生戒を超える為人底があり得るのかどうかという懷疑である。明眞大師は長慶のこのような立場にあきたらぬものを感じながら瑠庵主に拳似したもののようである。

・把將性命来 そのように高尚なことがお出来になるのなら、まず殺された蛇の命をここにお出しなさい、といつ明眞に対する批判。  
・在庵中只是劈柴種菜 瑠庵主に代わつた言葉。明眞に対する批判の方向においては等しい。庵主のそれがストレートであるの

に対し、婉曲である。しかし高尚な立場を峻拒する仕方においてはむしろきびしい。なお入矢義高「南泉斬猫私解」、『空華集』  
一三〇頁参照。

時に江州の東林寺に長に維摩經並びに肇論を講ずる座主神建なる有り。問う、如何なるか是れ觸目菩提。師乃ち一脚を蹠起して他  
に示す。座主云く、無礼なること莫れ。師云く、無礼ならず、三个現在せり。座主の一到に揀取するに任す。座主會せず。遂に状を江  
州に置きて、刺史李万巻に陳論す。李公判じて云く、伏して以に三乘の至教一蔵もて蔽持す。載する所の文詞唯だ佛性を窮むるのみ。  
事は能く幽に現じ理は實に玄に通ず。三教の根源を統へ群迷の依仰するところと作る。既に親を辞し俗を弃てて褐を被て經を講ず。經  
に明文有り疏に盡くさざるは無きに、自らはれ智辯到らずして、謬りて三身を判じ體解圖かならず。濫りに八識を轉じて智を將て智  
を辯じ、狂に功夫を用いて文を將て文に執す。豈に大錯に非ずや。況んや師は乃ち深く肇論を窮め、維摩に洞達するをや。筆に青青  
たる翠竹盡く是れ眞如、鬱鬱たる黄花般若に非ざるは無し有り。大士には菩提は是れ障にして能く諸願を障う有り。此の両教既に謬  
詞に非ず。且つ師は菩提を辯ずるの道すら尚お分明ならず。鬱鬱たる黄花爭でか能く見性せん。斯くの如き見もて何ぞ經を講ずる  
ことを用いん。高座に宣揚するは他の中下を欺るのみ。何ぞ自ら究竟を玄にせずして壇に愚聰を聘せ、垢を抱きて禪を問ひ發言諦な  
らざるや。尊宿念を垂れて觸目に相い呈せり。理既に共に通ずるに、何ぞ自ら會せざるや。只だ三个の如き何ぞ法身に異らん。師の  
了能を鑿るに略般若無し。何ぞ頓に惶して便ち無生を見ざるや。假相の菩提は空しく名字有るのみ。信に法身の只だ共に一源とする  
有るのみなるに、形儀を改換して凡心自ら乱る。眞心了了として字無く名無し。見性して惶惶たれば、何をか言ひ何をか説かん。師  
の如きは只だ菩提の處を問うて言を將て對敵し、達磨の來蹤を埋没するのみ。若し寂嘿を領して宗と為さば、維摩一生屈を受けん。師  
は豈に見ずや、筆に四不遷の義有り、生に六不空の談有り。乃ち知りぬ觸目の義は智慧に干せず、不遷の理は永く恒沙に在ることを。  
躰は瑠璃に似、色は啞喙の如し。其の大小に随う好醜何にか安ぜん。即色即空なれば何の言を將てか對えん。  
奇なる哉、空門の弟子色空を會せず。却つて状詞を置きて公に投じて断理せしむ。只だ儒教の如きすら尚お戸を出でずして一切の

事を知り、臆を窺わずして天下を知ること有り。明らか<sup>に</sup>之を知るを知と為し、之が不知を知るを知と為す。俱に智に歸するなり。辯智の義すら尚お斯くの如し。學佛の人何ぞ佛性に迷わんや。師の貞を見るに意を挙げ昂藏す。將に為<sup>ら</sup>えり業は無生を蘊み、道は大覺を弘むと。動用に及びては全く是れ凡情なり。詞狀但だ誹謗の言有るのみにして、出口全く聲聞の行に乖く。再三奉勸す、且く自ら思惟せよ。知識は學徒を屈せざるなり。真如豈に言句に随わんや。眞見は無像にして其の像分明なり。實聽は無聲にして其の聲絶えず。洞達すること之の如ければ、一切に非ざること莫からん。師之れ肯がわざれば再び狀を把ち來れ。忽<sup>も</sup>公を以て窮むれば必ず好事無からん。聊か一判を申べて略玄猷<sup>を</sup>表せり。詞峯を出ださざれば安ぞ能く辯正せん。但だ此の判を執りて將て寺中に歸り、衆を集めて聲鐘し眞實を詮諦せよ。汝若<sup>も</sup>也信ぜざれば再び狀を將ち來れ。若し定實すれば便ち自ら佛を礼すること一百拜せよ。仍りて更に威儀を具し、彼に往きて知識に礼問せよ。罪を造りて懺悔すれば衆罪は霜露の如く、慧日忽ち頓に前罪を消し去らん。

報慈拈じて僧に問う、作摩生<sup>そもん</sup>か道わば古人を屈得せざるを得ん。僧對えて云く、這個の什摩の道理に據るや。對えて云く、若し是れ別人ならば大家喫飯す。

・青青翠竹<sup>云</sup> 道生の語と伝えられる。

・菩提是障能障諸願 維摩經菩提品に「障是菩提、障諸願故」とあるのによるのであるが、ここでは座主が菩提に固執するのを批判するために引いてあるらしく見えるので、両句の意味は全く異なつたものとしなければならぬ。

・鑒師了能 原文は師鑒了能とある。一応右の様に改めて読んでおく。

・肇有四不遷之義 物不遷論參照。

・生有六不空之談 不明。

汾州和尚、馬大師に嗣ぐ。師諱は無業、姓は杜、商州上洛の人なり。初め母李氏忽ち空中に言有るを聞くに曰く、寄住せん。得たりや。已にして方めて娠せり。誕生の夕異光室に滿てり。成童に至るに及び兒戲を為さず。行くときは必ず直視し、坐するときは乃

ち踟躕す。商の緇徒見て皆な歎して曰く、此れ無上の法器なり。速やかに出家して三寶を紹隆せしめよ、と。九歳にして父母に啓して商州開元寺の志本禪師に依る。禪師授くるに金剛、法華、維摩、涅槃等の經を以てす。一覽して遺する無し。年十二にして剃落し、襄州の幽律師に具戒す。四分律疏を稟け、一夏肆習して便ち能く敷演せり。長に花嚴涅槃等の經を講す。時に生筆泯ぜず、琳遠再興すと謂えり。

後、洪州の馬大師禪門の上首なるを聞き、特に往きて瞻礼す。師身は六尺を逾え、屹として立山の若し。馬大師一見して之を異として曰く、魏魏たる佛堂、其の中に仏無し。師礼して問うて曰く、三乗の至教は粗亦た研窮せり。常に禪門の即心即佛を聞くも實に未だ了する能わず。伏して指示されんことを願う。馬大師曰く、即ち汝が了せざる所の心即ち是れ、更に別物無し。了せざる時は即ち是れ迷、了する時は即ち是れ悟。迷えば即ち是れ衆生、悟れば即ち是れ佛道。衆生を離れて別に更に佛有らず。亦手の拳と作り、拳の手と作るが如し。師言下に豁然として大悟し、涕淚悲泣して馬大師に白して言く、本より將に謂えり佛道長遠にして、曠劫に懃苦して方始て成ずることを得と。今日始めて知りぬ法身實相本自具足す。一切万法心より化生し、但だ名字有るのみにして實なる者有ること無しと。馬大師云く、如是、如是。一切心性不生不滅、一切諸法本自空寂。是の故に經に云く、諸法は本来より常に自ら寂滅の相あり、と。又云く、畢竟空寂舎と。又云く、諸法は空を坐と為す。此れ則ち諸佛如来、無所住處に住するなり。若し是くの如く知らば即ち是れ空寂舎に住し、法空座に坐し、拳足下足道場を離れず。言下に便ち了して更に漸次無きなり。所謂足を動かさずして涅槃の山に登るなり。

・ 仏道長遠云 法華經化城喻品に「仏道長遠、久受勤苦、乃可得成」。

・ 一切心性不生不滅 起信論に「所謂心性不生不滅」。

・ 一切諸法本自空寂 法華經信解品に「一切諸法、皆悉空寂」。

・ 諸法從本來云 法華經法師品の句。

・諸法空為坐 法師品の句。

・拳足下足不離道場 維摩經菩薩品に「菩薩若應諸波羅密、教化衆生、諸有所作、拳足下足、當知皆從道場來、住於佛法矣」とあるのを参照。

・不動足而登涅槃山 出所不明。

大師直に寶所に造りて化城に棲ます。元和皇帝宇を御するの三年に於いて、兩度詔して請す。師は病と辞して赴かず。穆宗位に即くに至りて重ねて旨を降す。使曰く、此の度は聖恩常時に並ばず。師笑つて云く、貧道何の徳有りて累りに聖主を煩わすや。行くことは則ち行かんも道途恐らくは殊ならん。乃ち行を作す次いで剃髮沐浴し、中夜に至りて徒弟等に告げて云く、汝等見聞覚知の性、虚空と壽を同じゅうす。猶お金剛の破壊す可からざるが如し。一切諸法は影の如く響の如く、實なる者有ること無し。是故に經に云く、唯だ此の一のみ事實にして餘の二は則ち眞に非ずと。言已つて跣跣して奄然として化す。長慶三年癸丑の歲十二月二十一日茶毘し城西に塔す。勅して大達禪師澄源の塔と謚す。汾州の刺史揚讚碑文を撰す。

・直造寶所、不棲化城 法華經化城喩品による。

・經云云 同じく方便品の語。

大同和尚、馬大師に嗣ぐ、師諱は廣澄、未だ行録を覩ず、化縁の終始を決せず。問う、如何なるか是れぞ。師云く、返り去る。如何なるか玄中又た玄。師云く、返り去らず。

金牛和尚、馬大師に嗣ぐ。師は尋常自ら飯を作つて衆僧に供養し、飯を將つて堂の前に来り了れば乃ち掌を撫つて舞を作して大笑して云く、菩薩子、飯を喫し来れ。後に僧有り、拳して長慶に問う、古人掌を撫つて大笑せる、意作摩生そもさん。長慶云く、ただ齋に因つ

て慶讃するに似たり。僧洞山に問う、掌を撫つて大笑する是れ奴兒婢子なりや。洞山云く、是。僧云く、向上の事、請う師直指せよ。洞山云く、惣に未だ曾て汝が問つを見ず。僧云く、只今現に問う。洞山云く、咄、這の奴兒婢子。

金牛和尚は馬祖に嗣法。師は普段自分で飯を作つて衆僧に供養していたが、炊いた飯を食堂の前に持つてきて手をたたいてダンスをし、大笑いして、菩薩子たちよ飯を食いに来なさいと云つた。後にある僧が長慶にこの話を取り挙げて問つた、古人が手をたたいて大笑いしたのはどういふ心算でしょうか。長慶が云つた、齋にことよせて慶びをのべているのだ。僧が洞山に問う、手をたたいて大笑いしたのは奴婢の仕業ではありませんか。洞山は云つた、そうだ。僧が云う、向上の事をすぱとおっしゃってください。洞山が云つた、ぜんぜんお前が問つていとは思われない。僧が云つた、只今現に問つております。洞山が云つた、咄、この奴婢め。

・太似因齋慶讃 百丈懷海の竟卷十四、四一五七頁の長慶の代語に「也是因齋慶讃」とある。

龜洋和尚、馬大師に嗣ぐ、師諱は無了、俗姓は沈、甫田縣壺公宏塘の人なり。七歳にして出家し、君挈白之重院、遽に院の家の如きを視る。十八にして落髪し、清源靈泉寺に受具す。好んで山水に遊ぶ。院の北に樵採して徑無し。師乃ち錫を振つて行き、六眸の巨龜に遇う。須臾にして失す。乃ち庵を結んで居す。一塵の虎に逐われ來たる有り。師は杖を以て其の虎を約住す。後に龜洋と号す。續いで一僧有り、近ごろ鐘陵より至り、馬大師の意旨を挙す。師云く、吾れ馬大師の旨を得たり。遷化に臨む時、垂訓して偈有り、曰く、八十年来西東を辨ず、如今要せず白頭公。長に非ず短に非ず大小に非ず、還つて諸人と性相同じ。來無く去無く兼ねて住無く、本来自性空を了却す。偈し畢りて儼然として寂す。正堂に塔す。後に二十載、塔下に水有りて淹浸す。乃ち發いて看るに師の全身水中に浮かぶを見る。閩王之を聞いて將つて府庭に釐取して供養し、塔を造り安置せんと擬す。土庶瞻敬す。師は氣を放ち闔府皆な聞く。閩王乃ち香を焚いて啓告す、如若し故山に却復せんとならば、乞う氣を収めよ。師乃ち香氣を放つ。闔廓皆な瞻礼す。當時、厚く什物を宣い、仍りて現在のの本塔に安存せり。

・七歳出家以下 読めない。伝灯録卷八には「年七歳、父攜入白重院、視之如家」と言つ。

・辨西東 原文「辨東西」とあるが伝灯録により改める。

・亀洋和尚は僧を介して馬祖の法を嗣いだ人。碑文に「亀陽」とも云つ。

陳禅師同に住す、師諱は慧忠、仙遊縣の人なり。俗姓は陳、九歳にして亀洋庵に詣り出家す。剃度の後便ち遊方して庵和尚に遇つ。問う、離するに何れの方よりせる。師云く、六眸峯庵。還た六通を具すや。師云く、重腫に非ざるを患う。便ち故山に復す。會昌の沙汰に遇い、避けて五六年に幾し。後に宣宗中興す。師曰く、古人(原作之)言える有り、上昇の道士録を受けず、成佛の沙弥戒を具せず、と。遂に午を過ぎて粒せず、宇せずして禅す。此の山に終わる。門人、沈禅師の塔の東隅二百歩に葬る。土庶皆な云く、亀洋の二真、と。今に至つて香燈絶えず。祈祷するに靈應少なからず。亦た是れ黄璫先輩碑文を製す。

陳禅師(亀洋禅師と同じ住した)、師諱は慧忠、仙遊縣の人、俗姓は陳、九歳で亀洋庵に詣つて出家し、剃度の後遊方して庵和尚に遇つた。問う、どこからやつて来た。師が云う、六眸峯庵です。六神通を具えておるか。師が云う、重腫でないのを患えております。そこで故山に帰つた。會昌の沙汰に遇い避けること五六年であつた。後に宣宗が中興した。師が云う、古人が云っている、上昇の道士は籙を受けず、成佛の沙弥は戒を具しない、と。そこで午を過ぎると食事をせず、宇せずして坐禅し、此の山に終わった。門人は沈禅師の塔の東隅二百歩のところに葬つた。土庶は皆な、亀洋の二真と云つた。今に至るまで香燈が絶えることなく、祈祷に対する靈應が多かつた。また黄璫先輩が碑文を製した。

・伝燈録卷二十三に華州草庵法義禅師法嗣として伝える。本文中の庵和尚はこの草庵法義であらう。

・古人有言 不詳。

・成佛沙弥不具戒 葉山伝に云う石室の高沙弥のこと(祖堂集四一八三頁)。伝灯録卷十四に一章を立てている。

・遂午而不粒 伝灯録には「遂過中不食」とあるのによって「過」を補つて読む。破仏によってすたれた戒律をもとにもどそう



としたもの。

黒磻和尚、馬大師に嗣ぐ、洛京に在り。問う、如何なるか是れ密室。師云く、耳を截りて街に臥す。如何なるか是れ密室中の人。師手を以て胸を抛す。

黒磻和尚は馬祖に嗣法した。南京に居した。問う、どのようなのが密室でしょうか。師が云う、耳を截られて街にねころがっている。どのようなのが密室中の人でしょうか。師は手で胸をかきむしって嘆いた。

閉魔巖和尚、馬大師に嗣ぐ、師常に杈子を提ぐ。僧の参ずるを見る毎に、髻頂に便ち杈して云く、那个の魔魅、你をして出家せしめ、那个の魔魅、汝をして受戒せしめ、那个の魔魅、你をして行脚せしむるや。道い得るも亦た杈下に死す。道い得ざるも亦た杈下に死す。速に道え、速に道え。其の(僧)無對。師便ち打して趁い出だす。

閉魔巖和尚、馬祖に嗣法。師は常に杈子をひっさげていた。僧が参ずる毎に首根っこにつきつけて云う、どの魔魅がお前を出家させ、どの魔魅がお前を受戒させ、どの魔魅がお前を行脚させたのか。答えても杈子でつき殺し、答えなくても杈子でつき殺すぞ。速に道え、速に道え。其の僧は答ない。師は打って追い出した。

・伝灯録では五台山秘魔巖和尚として一章を立てる(卷十)。

・道得亦杈下師死 徳山の「道得也三十棒云」と同じパターン。

龐居士、馬大師に嗣ぐ。居士生るるに衝陽自りす。

因みに馬大師に問う、万法と侶と為らざる者是れ什摩人ぞ。馬師云く、居士の一口に西江の水を吸盡するを待ちて、我は則ち你が為に説かん。居士便ち大悟し、便ち庫頭に去ゆきて筆硯を借り、偈を造る。曰く、十方同じく一會し、各各無為を學ぶ。此は是れ佛に

選ばるるの處、心空にして及第して歸らん。

而して乃ち駐泊して參承するもの一二歳の間、遂に儒形を変えずして心は像外に遊び、情を曠しくして行は眞趣に符し、跡を渾じて人間に卓越す。寔に玄學の儒流にして乃ち在家の菩薩なり。初め襄陽の東巖に住し、後に郭西の小舎に居す。唯だ一女を將て扶持せしむ。竹漉籬を製造して毎に女をして市貨がしめ、以て日給を遣る。

・選佛處 丹靄和尚の伝に、「求選官去」とした丹靄に馬祖の所へ行くよう進めて僧が云う「江西馬祖今現住世說法、悟道者不可勝記、彼是眞選佛之處」

平生築道の偈頌三百余首に近かる可し。廣く世に行わる。皆な言は至理に符し、句は玄猷を闡くを以て儒彦の珠金と為り、乃ち緇流の篋寶たり。略一二を陳べて餘は盡くは書せず。

偈に曰く、心如にして境も亦た如、實無く亦た虚無し。有も亦た管せず、無も亦た居らず。是れ賢聖ならず、了事の凡夫。

又た偈に曰く、看經は須らく義を解すべし、義を解して始めて修行す。若し了義教に依らば、即ち涅槃の城に入る。如し其れ義を解せざれば、多見なるも盲に如かず。文に縁りて廣く地を占むれば、心牛肯えて耕さず。田田皆な是れ草なれば、稲は何れの處よりか生ぜん。

・縁文以下四句 寒山詩に「土牛耕石田、未有得稻日」、稲は同じ字音の道に意味を通わせている。

又た偈に曰く、易し復た易し、即ち此の五蘊に眞智有り。十方世界は一乗として同じ、無相の法身豈に二有らんや。若し煩惱を捨てて菩提を覓めなば、何方に佛地有るやを知らざらん。

又た偈に曰く、無貪は布施に勝り、無癡は坐禅に勝る。無嗔は持戒に勝り、無念は縁を求るに勝る。盡く凡夫の事を現じて、夜来安楽に眠る。寒き時は火に向かつて坐す、火は寔に本より煙無し。黑暗女を怕れず、功德天を求めず。任運に方便を生ずるに、皆般

若の船に同じ。若し能く是くの如く學べば、功德實に無邊なり。

・求縁 見なれない語であるが、善知識を求めることであるうか。

又た偈に曰く、世人は龐老を嫌つも、龐老は他を嫌わず。門を開けて知識を待つに、知識は來過せず。一丸万病を療し、藥方の多きを假らず。

・一丸二句と前とのつながり具合が悪い。

又た偈に曰く、心若し如ならば神自ら虚なり、藥を服せずして病自ら除す。病既に除すれば自ら見る、蓮華と如意珠とを。事に勞する無れ、駈駈すること莫れ。智者は財色を觀て、了智す幻虚の如しと。衣食もて身命を支え、相勤む如如を學べと。時至りて庵を移し去るも、物の盈餘す可き無し。

又た偈に曰く、貪嗔肯えて捨てずして、徒らに釋書を読むことを勞す。方を見て藥を服せざれば、病は何の處よりか除せん。空に取すれば空是れ色、色に取すれば色は無常なり。色も空も我が有に非ず、端坐して家郷を見る。

又た偈に曰く、人に一卷の經有り、無相にして復た無名。人の解く轉讀する無く、有我の聴くこと能わざる有り。如し能く轉讀し得れば、入理して無生に契う。菩薩道は論ずるに非ず、佛も亦た成るを要せず。

居士遷化に臨みし時、女をして湯水を備えしめ、沐浴して衣を著し、床に於いて端然として跏坐す。女に付属し已って告げて曰く、侂の日の午すをる看れば則ち報じ來れ。女は言に依りて看已って報じて云く、日の已に午するに當り、日の陽精を蝕せり。居士云く、豈に任摩の事有らんや。遂に起ち來つて自ら看る。其の女尋則に床に據り端然として化す。父は廻りて之を見て云く、俊なる哉。吾れ之を説くこと前に在りて之を行うこと後に在り。此れに因りて居士七日を隔てて歿れり。

居士は遷化に臨んだとき、娘に湯を用意させ、沐浴して衣服を着てから床の上に端然と趺坐した。娘に遺言しおわって云った、お天道さんが眞上にきたら知らせなさい。娘は言葉通りに確かめてから知らせた。お天道様はもう眞上に来てますよ、しかも皆既日食です。居士が云う、そんなことがあるものか。そこで起って来て自分で確かめた。娘はすぐに床に坐って端然として遷化した。父はもどって来てこれを見て云う、俊なるかな、わしは言つことは前だったが、行つことは後になったわい。そこで居士は七日のちに遷化した。

## 祖堂集卷第十五